

OLDK - no more nLDK -

寝室 (+500)

より開放的になるようにもっともレベルの高いところに持ってくる。必要に応じて閉ざすことも出来る。レベル差部分は収納として利用する。

書斎 (+150)

プライベートな感覚で使えるように奥まったところに配置されている。寝室北側のブラインドを閉じることでより独立した空間となる。



キッチン (+400)・ダイニング (+150)

食事をつくるという行為と食べるという行為の違いに配慮し、レベル差を設ける。

居間 (+0と+450)

2つのレベルがあり、気分によって居場所を選択できる。さらにベランダまで広がっていくことによって、内部のみならず外部との繋がりも生まれる。

従来型のいわゆる nLDK タイプの間取りでは空間の定義は壁に囲われることでなされていた。例えば、隣の部屋が寝室なのか、居間なのか、書斎なのか、といった要素は排除されて、部屋を構成する要素はただインテリアだけで決まる。

それでも機能的には問題はないのかもしれない。寝室は寝ることができれば必要にして充分なのだろうから。しかし、これではそこに豊かな暮らしのある風景は創造できないだろう、と我々は考える。

そこで、我々は部屋の定義を壁ではなく、緩やかな段差で構成する。この段差は確かに空間を部屋という形で定義するものになるが、壁という完全に閉ざされた形ではないため空間は繋がっていく。さらに、この段差は時にはイスになり、机になり、と自由に使えるスペースとなる。すなわち、使い方にフレキシビリティを与えることにより、定義された部屋から空間へと変わる。

空間を創造することでそこでの行為は規定される。

それならば行為を解放するために空間を解放したらいいのではないだろうか。

